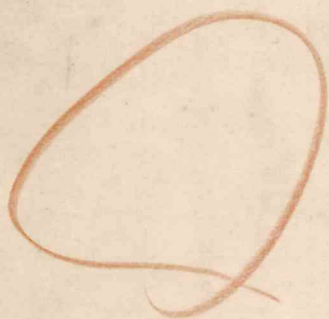


詩と眞實

第 八 號

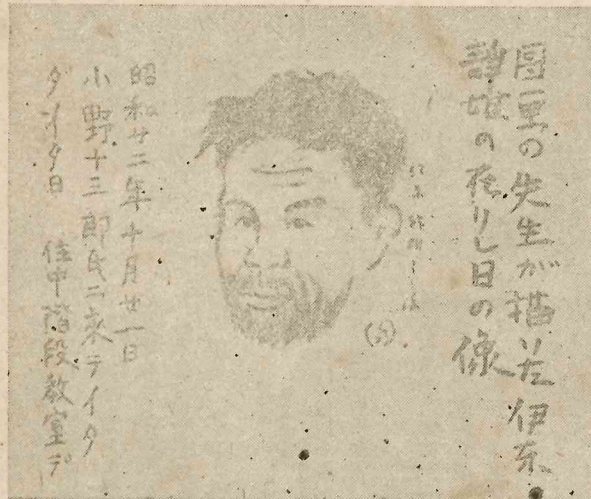


詩と實眞

1953年NC. 8

伊東靜雄追悼

伊東靜雄との交友	富士 正晴	6
「燈臺の光を見つつ」	小野十三郎	10
伊東靜雄氏を想ふ	杉山 平一	14
墓辺に	飛鳥 敬	16
伊藤靜雄を哭す	織田喜久子	18
一本の雜草	藤村 雅光	19
最後の一言	田中 克己	20
「わが家はいよいよ小さし」	港野喜代子	21



伊東靜雄作品抄
伊東靜雄略年譜

22 4

煙突について 他一篇	玉置 昌一	23
鐵骨中央卸賣市場	乾 武俊	24
泥土の墓	石橋孫一郎	25
ひびき 他一篇	越智 一美	26
海 他一篇	石濱 浩三	27
無賃乗車 他二篇	鷗崎 博	28
自轉車 他一篇	竹内 薰也	29
思い出	森口 武男	30
津波	港野喜代子	36
旗はうなだれて	村井 慎二	37
澱粉工場の突風	足立 卷一	38
無数の目	林 影	39
蝙蝠 三篇	藤村 雅光	40
海	坂本 賢三	41
獸の手	服部 眞輔	42
さかんに俺の名を	溝口作太郎	43
詩人の破片	亞騎 保	44
多勢 他一篇	權 敬澤	46
雀	南淵 信	47
遅い朝 (ジャック・プレヴェール)	開高 健譯	48
○		
大衆について	坂本 賢三	30
詩誌めぐり 「コルボウ」	木場 康治	32
書評・砂丘作品集	柏岡 淺治	50

詩と眞實既刊號目次

〔每號 A 5版50頁〕

1	リルケへの對決……田木 繁 高揚と機能……長谷川龍生 「碧」に就いて……向井 敏 「紙芝居」覺書……木場 康治	4	ニヒリズムと宗教……小野十三郎 的なものへの傾斜 火吞む樺をめぐって……飛鳥 敬 小野十三郎 詩集について……杉山 平一 小野十三郎に おける二つの詩……鷗崎 博 火吞む樺解説……向井 敏 小野十三郎詩集 出版記念會の記……柏岡 淺治 判斷について……谷澤 永一
2	否定について……谷澤 永一 關西詩人と 作曲家の會……藤本 浩一 「今日の詩 論」に就いて……向井 敏 「夜の詩會」讀後……柏岡 淺治 「音樂の時」 に就いて……吉川 仁	5	詩に於ける「現代的 なもの」に就いて……西尾 牧夫 現代詩の系譜〈座談會〉 乾 武俊・小野十三郎 杉山 平一・山村 順 港野喜代子・柏岡 淺治 石橋孫一郎 ルイスの信條……石橋孫一郎 C・D・ルイスの詩……茂木 兼雄 壺井繁治詩集……田木 繁 表現について……向井 敏 池田克己さんのこと……港野喜代子
3	難解性と抒情性……村岡 淺治 リルケに於ける「物」……田木 繁 平和の鑑造……長谷川龍生 「願望」に就いて……向井 敏 シグナルの抒情……木場 康治 雪の山道で……山中 二郎 伊東靜雄氏のこと……港野喜代子	6	インテレチュアルと エモーショナル〔對談〕深瀬 基寛 小野十三郎 傷痕——田木の リアルテについて……飛鳥 敬 論理的ということ……向井 敏 ニーパー「キリスト」 教人間觀」第一部……茂木 兼雄 詩誌めぐり「律動」……山中 德雄
4	——作 品—— 小野十三郎 藤村 雅光 港野喜代子 飛鳥 敬 矢内原伊作 柏岡 淺治 足立 卷一 濱田 知章 山村 順 吉川 仁 南淵 信 荒木 利夫 天野 忠 茂木 兼雄 乾 武俊 牧 羊子 山崎都生子 南出さく子 原田 子寛 中村 光行 鷗崎 博 越智 一美	5	——作 品—— 竹中 郁 飛鳥 敬 丸本 明子 長谷川龍生 權 敬澤 亞騎 保 足立村 雅光 大槻 鉄男 原田 子寛 島村本 賢 港野喜代子 森 博 南淵 信 越智 一美 鷗崎 博 金 時 村岡 淺治 戸田 茂 天野美津子 吉澤比呂志 中島 陸郎 (附・同人住録)
5	——作 品—— 杉山 平一 山村 順 飛鳥 敬 越智 一美 長谷川龍生 足立 卷一 港野喜代子 柏岡 淺治 坂本 賢三 鷗崎 博 牧 羊子 桃井 忠 服部 眞輔 中 鉄 幸生 武俊 浩三 天野美津子 黒田 義男 森 博 吉澤比呂志 柴田 榮 勇輝 敏 大上 敬 田木 繁	6	——作 品—— 坂本 賢三 君本 昌久 溝口作太郎 田尻 宗夫 岩橋 敏夫 鷗崎 博 茂木 兼雄 森口 武男 足立 卷一 飛鳥 敬 村岡 淺治 田木 繁 石橋孫一郎 石濱 浩三 越智 一美 織田喜久子 丸本 明子 港野喜代子 柴田 勇輝 桃李 長谷川龍生

わがひとに與ふる哀歌

太陽は美しく輝き
あるひは 太陽の美しく輝くことを希ひ
手をかたくくみあはせ
しづかに私たちは歩いて行つた
かく誘ふものの何であらうとも
私たちの内の
誘はるる清らかさを私は信ずる
無縁のひとはたとへ
鳥々は恒に變らず鳴き
草木の囁きは時をわかつたとするとともに
いま私たちは聴く
私たちの意志の姿勢で
それらの無邊な廣大の讃歌を
あゝわがひと
輝くこの日光の中に忍びこんでゐる
音なき空虚を
歴然と見わくる日の發明の
何にならう
如かない 人氣ない山に上り
切に希はれた太陽をして
殆ど死した湖の一面に遍照さするに

八月の石にすがりて

八月の石にすがりて
さち多き蝶ぞ、いま、息たゆる。
わが運命を知りしうち
たれかよくこの烈しき
夏の陽光のなかに生きむ。
運命？ さなり、
あゝわれら自ら孤寂なる發光體なり！
白き外部世界なり。
見よや、太陽はかしこに
わづかにおのれがためにこそ
深く、美しき木蔭をつくれ。
われも亦、
雪原に倒れふし、飢ゑにかけりて
青みし狼の目、
しばし夢みむ。

燈臺の光を見つつ

くらい海の上に 燈臺の緑のひかりの
何といふやさしさ
明滅しつつ 廻轉しつつ
おれの夜を
ひと夜 彷徨ふ

さうしておまへは
おれの夜に
いろんな 意味をあたへる
嘆きや ねがひや の
いひ知れぬ――

あゝ嘆きや ねがひや 何といふやさしさ
なにもないのに
おれの夜を
ひと夜
燈臺の緑のひかりが 彷徨ふ

百千の

ひやくせん
百千の草葉もみぢし
野の勁き琴は 鳴り出づ
哀しみの
熱れゆくさまは
酸き木の實
甘くかもされて 照るに以たらん
われ秋の太陽に謝す

倦んだ病人

夜ふけの全病舎が停電している。
分厚い分厚い闇の底に
敏感なまぶたがひらく。
(ははあ。どうやら、おれは死んでるらしい。
いつのまにかうまういつてんだな。
占めた。ただむやみに暗いだけで、
別に何ということもないようだ。)
しかしすぐ覺醒がはつきりやつて来る。
押しころしたひとり笑い。次に呟き。

伊東靜雄との交友

富士正晴

伊東靜雄の死から随分時間がたつていような氣がするが案外たつていない。四月二十七日の今日は五十日目になるのだろう。昨日は四十九日で、北餘部の遺宅で坊さんと呼んで拜むということだつたが、わたしは家を開けられず行けなかつた。

去年の大晦日に久坂葉子を失い今年には伊東靜雄を失つたが、激しい感傷的な悲しみは起らず、遺稿集を出すという風な實際的な行動の方に心がゆくというのは、わたしはどうなつてゐるためだろう。久坂の家へ行つてもわたしは位牌を拜まないし、よし昨日北餘部へ行けたとしても、とても伊東靜雄の位牌は拜む氣がしないだろうと思う。出征がきつかけとなつて、わたしは屍や位牌や墓を、自分をいつわつてゐるという不快の觀念なしに拜むことが出来なくなつたのかもしれない。わたしは妻の父の墓さえ、その前へ行

し、十分寛容に死んだとわたしには思はれる。十分に寛容なのは十分自らのむところがあるからだろう。寛容なだけに彼の他人への批判は正確で嚴格であつたと思う。大抵の詩人を彼は腹の底でせせら笑つてゐたかも知れぬし、わたしだつて御多聞に洩れないだろう。

昭和十年か十一年かにわたしはじめて伊東靜雄に大阪高等學校の南のわたしの家であつた。わたしは彼がどんな詩を書くのか、どんな人間であるのかも知らず、當時住吉中學校に通つてゐた弟から乞食という仇名の詩を作る國語の教師のことを聞いて、手紙を弟にもつて行かせて招いたのだつた。色の黒い、顔のまっすい、もしやもしや髪の小さな貧弱な風采の上らぬ九州辯の男がやつて來た。しかし九州辯と關西辯の違いと、色の白黒のちがいをのければ他の點はわたしにもびつたり當てはまることであつた。わたしは伊東靜雄とどちらか背が高いのか今尙わからない。

伊東靜雄は「わがひとに與ふる哀歌」という立派な詩集をわたしに呉れ、「孔雀の悲しみ」という詩を美しい字で原稿用紙に書き、せきこむような調子でそれを朗詠して聞かせた。そして母の作つた（その時にかぎつてやたらに不出來な）ライスカレーを食べて歸つて行つた。

それから以後、わたしは伊東靜雄と一緒によく歩き廻つた。阿倍野交又點の「かつらぎ」というコギトの例會のよ

きながら拜まなかつた。久坂葉子や伊東靜雄の墓を拜むよりも、彼等の作品を読みかえす方がわたしには適した追悼の行爲である。

しかし、伊東靜雄が死ぬ前に、死んだら骨は三日間大阪においといてくれ、ほんとに心持ちのある人は來てくれるだろう、と言つたと聞いて、わたしは何か一種いやな氣がした。何がいやなのかよく分らないがいやな氣がした。

伊東靜雄が千代田の病院に入院してから四年ほどの間に、わたしは一度しか見舞いに行かなかつた。行けなかつたのでもあるし、行かなかつたのでもあつた。顔がこの位に小さくなつてと、その顔の小ささを兩手の拇指と人さし指で圓をつくつて示されると、尙更に行けなくなつたのである。健康な吾氣そな顔をして行くのが何か病人に悪いような氣持がわたしを非常にはばんだ。

伊東靜雄が日本で最も日本語を知つてゐた詩人だというのはすつと以前からのわたしの信念である。彼の尊敬してゐた萩原朔太郎や佐藤春夫でも、伊東靜雄より日本語が下手臭だとわたしは思う。このことはひどくさしさわりのあることだが、やはりこの際はつきりしておいた方がよい。伊東靜雄は日本語を非常に正確に使い、すみずみまで生かして使つた。それは伊東靜雄の禮儀正しさとも關係があることだし、自己を守るのに忠實であることも關係があるだろう。伊東靜雄は自分に忠實に生き、十分自分を生か

くあつた喫茶店へ行つたり、阿倍野の大鐵前のビヤホールへ行つたりした。そのビヤホールには啞がよく來てゐたが、啞たちは立派な風采をして立派な深酷な顔をしてビールをのみながら手の指をつかつて話し合つてゐた。

「昨日大鐵のこのビヤホールの前にな、コジキとコジキによつた奴と立つとつた」と友達にいわれ、「あ、そらおれの兄貴や、おれの兄貴にきまつとる」と弟が答えたので相手かどきまぎしたというのはこのころの事だ。二人で歩き廻つて文學のことなど喋つて見ても、意見は一向に一致しなかつた。わたしは伊東靜雄の意見がチカチカしてやり切れなかつたし、伊東靜雄はわたしは何を言つてみても平然としてゐるのがひどく腹立たしかつたらしい。

「あなたは、一度も顔が赤くなつたことがないですね。詩人はパーツと顔を赤らめなくては本當の詩人じやないですよ」と彼は言つた。そして、保田與重郎の顔がパーツと赤くなる美しさ、合羞についてわたしに説明して聞かせたが、わたしの顔はてんから伊東靜雄の註文するように赤くはならないのだつた。彼にいわすと、詩人は錯亂しなくてはならず、キョトキョトおちつかぬ面持ちでヒステリーを起さねばならないのだつたが、わたしの考えるところでは詩人は錯亂してはならず、ヒステリーなど起してはならぬのだつたから、何か一言いつても喰いちがつた。しかし、彼は六、七才もわたしより年長であり、頭も良かつたから、多分彼がしやべりまくり、わたしが平然をよおつて相手

にならず、それが又、彼に腹を立てさせたというような事だつたのだろう。このころを思うと、丸で音楽が造型美術とけんかしているという感じがする。

それから四年ほどの間に、彼は住中のあたりの露地の中の家から「朝顔」という詩がその家をしみじみと表現している。堺の北三國ヶ丘へ移つてゐるし、彼とわたしとの間に大分親密なところも出来て來かかつてゐた。そしてわたしも、大高附近から鶴見橋通り四丁目へ移つてゐた。

北三國ヶ丘の家へはじめて行つた時、またかという感じがわたしにはした。「何とこの男は暗い格子のはまつた家が好きなことだ。」

それは怖らく彼の趣味なのだろうと思うけれど、住中附近、北三國ヶ丘、最後の北餘部の家、みんな何か日の入らぬような暗い家である。その暗い家の中で、彼は時々、ハーツと深い息を吐いたり、くらくらと目まいを感じたり、酒に酔つて詩を朗詠したりして暮らしてゐたのだ。眞面目に學校づとめをしながら。

わたしは相不變合つてはコーヒーをのんだり、ビールをのんだりしてゐた。どこかの飲み屋で東京落語の何とかという噺し家と握手したというのもこの頃であらう。わたしは母が洋裁店をやつていたので、その賣り上げの中から五圓札をもつては伊東靜雄と會つた。

心齋橋の歩道に座り込むほど酔つた彼が、通る若い女に

後にはその氣持が失せたやうだ。

或る時、彼が何を思つたのかわたしを藤澤恒夫の家へつれて行つたことがある。大阪の人間の完成の極致だといふれこみであつた。その彼が藤澤の家を出るなり、ハーツと息を吐いてああいう人はやり切れないと云つたのでわたしは非常に愕いたものだつた。わたしは藤澤恒夫に大阪的完成の極致を見なかつたし、又、ハーツと息を吐くほどやり切れぬとも思わなかつたから、伊東靜雄のその一種の勝手さにその時は呆れた。

わたしにとつて伊東靜雄は面白い人物であつた。彼の人生方法論は殆んどわたしの採用するところではなかつたが、それには必らず一種の面白さがあつた。

「あなたは豪傑ですがね、英雄にならなくては駄目なんだ。わたしは英雄になる方法を今學んでゐるんです。」

その英雄になる方法は聞かなかつたか、忘れたのか知らない。記憶しない。しかし、彼は非常に誇らし氣にそれを言つた。そのころ彼の思想的背景にあつたのは保田與重郎の相違はなかつた。彼はコギトの同人の中で保田與重郎しか認めていないやうな口吻だつた。しかし、「僕の友人の悪口をいうものを許すことが出来ない」という風な彼はコギトの同人のことを餘り悪くは言わなかつたやうだ。

中原中也、辻野久憲、佐藤春夫、立原道造、保田與重郎、森鷗外、太宰治などが、彼を通してわたしの中へ入つて來

「一寸、姉さん、姉さん」とやつてゐたことや、心齋橋筋のビヤホールで明治天皇御製を朗詠し終つたとたんに、ビヤホールの少女にひどく卑猥な冗談を話しかけたことなどを覚えてゐる。「夏花」の編んでゐたものもこの頃だ。わたしはその原稿を借りて、その評論を書いた。それは伊東靜雄の知人の栗山理一らのやつてゐる國文學雜誌「文藝文化」に連載された。栗山理一にも紹介された。柳田國男をほめていつか憐笑された記憶がある。

伊東靜雄とわたしとがゐる時、主として喋つてゐるのは伊東靜雄の方だつた。そしてその話の中に、そのころそのころの彼の愛する人物が出て來た。朝太郎・レーナウ・春夫・ヘルダーリン・鷗外・與重郎といった風に。中原中也・辻野久憲・立原道造なども出て來た。

伊東靜雄は年長の人らしく人生論或いは人生法といつたものをわたしに説法するのが好きだつた。その人生法をいうことを好きなのは林富士馬が今尚それを持ちつづけてゐるけれど、それが伊東靜雄の影響のみによるのか、それとも同じ長崎縣出身ということによるのかは判らない。出身ということでは思ひ出したが、彼は九州人を一般的には非常に嫌つてゐた。それから大學時代をすごした京都を非常に嫌つてゐた。けれど大阪という土地は彼には餘り嫌惡感を起さなかつたやうに思われる。東京へは時々間歇的に無しうに移りたくなつたらしいが不可能であつたし、

た。わたしはそれらのちん入に閉口しつづ、やはり伊東靜雄からその本を借りて讀むことをした。つまり伊東靜雄は現代の文壇の人とわたしとの間に幾つも窓を開いたのだ。しかし、わたしは所詮、彼の當時ひどく好まなかつた歐米式リベラリストであつたわけで、彼の理窟は胸元でつかえることが多かつた。だが、理窟は別としてわたしは彼の詩にはわたしの好きなやうに感心してゐた。

わたしはもうそのころ「人の詩に感心する」その感心の仕方わがものにしていた。わたしは中原中也にも立原道造にも（後者は何とか苦勞の揚句だが）感心することが出來た。この能力は伊東靜雄との交友なくしてはわたしの掴み得ないものだつたやうに思う。伊東とわたしの交友によつて、焦立ち辛抱したのは伊東靜雄ばかりではなかつたのだ。平然とした顔付きの富士正晴も辛抱したのであつた。わたしは理解を學んだ。伊東ならば寛容というそれである。思つてみれば伊東靜雄の四つの詩集も、憤りや激越の詩集と、寛容の詩集とが交代してゐるのである。

桑原武夫にわたしを紹介したのも伊東靜雄だつた。阿倍野斎場前の飛田遊廓のすぐそばにあつた桑原武夫の家へ行つて見ると、階段や廊下に赤い毛氈をしいたへんな二階建の家だつた。變なとわたしは思うのも道理、それは待合のあとを借りたのだということだ。わたしは桑原、伊東、わたしの間でどんな會話があつたのか殆んど記憶にない。後

『燈臺の光を見つつ』

伊東靜雄の靈に

小野 十三郎

「燈臺の光を見つつ」

詩集夏花の中にある

きみの数々の氣高く美しい詩のうちでも

ぼくが一番好きな詩。

今夜机に向つてその詩を読むと

きみがそこで「くらしい海の上」と云つたもの

また「おれの夜」とも云つた

そのきみの宇宙に

明滅し廻轉する清潔な光が

ひやりとした感觸で

サツと大きくぼくの内部の暗黒をも一なぎす

るのをじつさいに感じる。

何がそこに照し出されたか。伊東よ

それはぼくには見えないが。

伊東靜雄の側について強がつた。わたしのは強がりだが、伊東靜雄のは信念のごときものだつた。桑原武夫は、日本が勝つと信じるその具體的な根據を知りたがつたが、もとより答えようもないことである。

三つは、伊東靜雄の詩集「春のいそぎ」を弘文堂から出したことである。その文に桑原武夫ははつきり名が出ており、わたしは陰に廻つてゐる。「その他にもひとの好意を有難く思ふことが多くあつた」というの中にわたしが入つてゐるわけだ。この装釘はわたしができることになつてゐたが、弘文堂を喧嘩して出たため、弘文堂が拒否した。伊東はわ

から判斷してみればその時期はわたしは弘文堂書房をやめる前から、八丈書院の顧問（名のみの顧問であり、原稿を約束する係りにすぎない。いわば編集者と顧問との中間位の位事だつた）になつてゐた時代にわたる。對米宜戦は行われていた。そして、伊東靜雄にすれば「春のいそぎ」の中の詩を書いてゐた時代に當り、桑原武雄は大高教授から東北帝大へ移るまでの時代に當る。

伊東靜雄が桑原武雄とどうして知つたのかをわたしは今でも知らない。ただ、桑原武夫は「コギト」にアランの散文論を反譯してゐたようだつたし、「四季」の同人でもあつたからつながりはある筈だ。コギトの同人は保田、田中をはじめとし大高出身が主である。又、大高と伊東靜雄の勤め先住吉中學校とは歩いて十二、三分の距離にある。

桑原、伊東、わたしの間のことで思い起せることが二、三ある。一つは京都の北野神社の中の北野茶寮に、わたしが七丈書院として、桑原、伊東、大山定一らを招待してゐたことだ。これはその時の寄せ書きが残つてゐる。しかし今は探さひまを持たない。皆何かひどく勇ましいことを書いていたようだ。

二つは、大東亞戦争の豫想を話し合つたことだ。これは今から思うと、桑原武夫の豫想が完全に、細部に至るまで適中してゐる。伊東靜雄は神州不滅で、絶対に日本が勝つと主張してゐた。わたしはその間でふらふらしてゐる癖に、

たしの装釘を弘文堂に向つて主張するよりは、わたしの辛抱を求める方をとつた。わたしはどうでも良かつた。少しわたしは不愉快にしても、伊東の詩集が出ればよいと思つた。そういう考え方はいつもわたしの底にあるように思う。

序文に「たまたま一友人に伴林光平が

たが宿の春のいそぎかすみ賣の重荷

に添へし梅の一枝

の一首を示されて、ただちにそれによつて、「春のいそぎ」と題した」と書いてゐるのを、最近「伊東靜雄詩集」を編集してゐる時桑原武夫がこの一友人というのは保田與重郎のことだろうと言つた。その時期は保田が伊東にとつて一番價値をもつて一種の鼓舞者兼豫言者のような意味のあつたところだから、「一友人」保田」と思ふのは當然である。しかし、それは違つてゐるようだ。伊東靜雄はこの歌をひどくわたしに自慢し、「たまたま一友人に」という文句を自慢した。つまり心得ある國文學者は傳統として、自分が見つけた一首でも、たまたま一友人に示されたという風に言うのが立派なのであると言つたのである。こうした一種の儀式的な身振りは「春のいそぎ」の中に隨所に見られて面白いが、それはやはり幾分伊東靜雄の身によくついているところがある。

四つは、桑原武夫の山に關する本を八丈書院からわたしが出したことだ。これは一つ目の北野茶寮の宴と關係する

であろう。(伊東靜雄のすすめで。三島由記夫の第一小説集『花盛りの森』を出したのもこの七文書院である。)

さて、いくら書いてもきりがなから、わたしは戦争に行こう。わたしの應召する前日たまたま三島が來たりしたが、應召の記念寫眞には伊東靜雄や大山定一や高安國世の姿が見られる。その時、大山が寫眞屋で腦貧血を起したことを變に記憶している。

野戦へ行く時、わたしは伊東の詩を二、三篇ノオトして持つて行つた。「第一日」という詩は大陸で讀んでも、尙更感心した。大陸に足を踏み入れたことのない彼が、大陸の町の感じを、人の話だけであれだけ表現しているのには愕然とされたのであつた。その場所は

かくていくばくの丘陵^{たか}を越えけむ

二日の後の夕べ

辛うじて部隊とともに商城^{まち}の街に入るを得れば

さながら鐵の烈しく錯びゆくにほひ

擔低き巷に滿てり——われ初めて

血をかぎぬ

伊東靜雄に對するわたしの信頼感、彼の語脈の正確さ、言葉の心榮えの良さから來ていることは勿論であるが、それと共に彼の人の立派さからも來ている。伊東とわた

つた。

大東亞戦争は彼の身體をむしばんでいた。彼は病いに倒れた。そして四年の闘病生活の後に死が來た。

戦後にいろいろのことがあつた筈である。それが却つてわたしにはおぼろげなのは何としたことであろう。第四詩集「反響」の時もいろいろ、わたし達は話し合つた筈である。その装釘に庫田巖を推薦したのもわたしであつた筈だ。北余部の二つの床の高さのちがう家をつぎ合わせた暗い家へもわたしは三島郡に、彼は南河内郡にと家も離れ、わたしは京都に、彼は大阪に活計を得ていたから段々逢うことも少くなつていた。

けれど彼は、戦前、林富士馬やその他の人をわたしに紹介したように、島尾敏雄や、庄野潤三や齊田昭吉や長尾良をわたしに紹介した。その人々からわたしは彼の日常を耳にすることの方が多かつた。

こう書いて來て變なのは、わたしの「小ヴィヨン」に、しかし、伊東靜雄が拙かれていることだ。しかも、その伊東靜雄についてわたしが書いたことすらもはやおぼろげである。

住中附近・堺三國丘・黒山村北余部。そして最後の千代田國立病院の病室——彼のすんだところはどこも暗かつた。彼は阿武山日赤病院に移りたがつていたが、もうその頃は千代田から阿武山へ移すことも不可能であつた。

三好達治・桑原武夫。わたしの三人で二年前に一度計畫し、今年に入つて再度計畫し直して、實現した「伊東靜雄詩集」

しの間には、これは日本では普通のことだが、家庭と家庭のつき合いというものはない。しかし、わたしの方はいくらから伊東の家庭そのものとの關係もなくはなかつた。というものは、伊東靜雄の實際生活に少しタッチしたところとである。その點での伊東靜雄については今は書くことをしないが、生活者としての伊東靜雄に實に立派な一面があつたことは、單なる交友の上ばかりでなく、彼の文學の上でもわたしを打つたと思われる。

終戦の次の年わたしは復員した。復員服のまま伊東靜雄を住吉中學校に訪ねて行つたわたしは、伊東靜雄が一變しているので大變おどろかされた。

彼はもはや英雄を説かなかつたし、戦争がすんで良かつたですわねと言つた。しかし、そうした戦争に關する一切のことを、彼は頭の中から追放してしまつてゐることが感じられた。まるでそうしたこと表現のように彼は「わたしの顔、何か變つてませんか。變つたでしよう。氣がつきませんか」と目をギョロギョロ光らせながら顔をさし出した。わたしが一向氣付かぬので彼は失望しながら自分で説明した。それは眼と鼻の間にあつた大きな目ざわりないぼを手術して取り去つたということであつた。

戦争のことの話は彼が避けた。彼はわたしの軍服や戦闘帽をはなはだいやがつた。保田與重郎のことも言わなくな

は東京創元社で進行中の筈だけれどそれを生きている伊東靜雄の手にとらせようというわたしたちの望みは駄目になつた。しかし、それを駄目にしたのは、むしろ伊東靜雄の側に原因がある。彼は全詩集よりは「反響」にそれ以後の詩を加えたのを出したがつたのである。彼は戦争中の自分の詩を見るのも厭だとした。その點から、彼のこの考えは、如何にも彼らしいケツペキがあり、それでなければ出してはくれないと言いつつたカンベキも如何にも彼らしく尊敬に價する。しかし、一月餘りして、彼は寛容にも、妥協の意を示した。もう、どうでもよかつたのであろう。そしてそれからすぐ彼の死が來た。その間のことは桑原武夫が「伊東靜雄詩集」に解説することであろう。

死後、朝日に出了た三好の追悼文、毎日に出た桑原の追悼文はあらゆる意味で注目に價するし比較してよめば尙のことだ。わたしはそれについていうのはもつと後にしたい。わたしは一冊分位は、彼について言いたいことがあるのだが、當分、彼の最後の詩集の編集者であるにとどめようと思ふ。

(一九五三年五月三日)

追記 文林院靜光詩仙居士というのが彼の戒名だ。この戒名について彼の印象批評を聞けないのが残念である。薔儀は大阪でせず、故郷の長崎縣諫早でした。大變盛大であつたそうだが、詩人としての彼に言い及ぶものは無かつたかのようだった。諫早の旧家の主人公として扱われたらしい。戒名のことも諫早の葬式のこととそれはそれとして或る意味では、良いように思える。しかし例によつて戒名といふものは、どうもわたしに實感が起らぬ。きつとこの頃の坊主は詩人でないものであろう。てんと散文的な戒名をつける。伊東靜雄は伊東靜雄で結構。立派ないい名前だ。

伊東靜雄氏を想ふ

杉山平一

私がまだ松江の學校にゐたころ、伊東靜雄は、机の上の繪葉書を見ながら壁をあげて詩をつくる、といった傳説めいた噂をきいた。「わがひとに與ふる哀歌」が第一回文藝汎論詩集賞を得た頃ではないかと思ふ。未だ詩を書いていなかった私のようなものにも、「わがひと」といつた古風な言葉やその評判が、異様に強く印象された。

はじめて伊東靜雄氏の風貌に接したのは、戦争中、小野十三郎氏の「風景詩抄」と一しよに私の「夜學生」の出版記念會が、北濱の川ベリのレストランで開かれた日であつた。少し肩のはつたきちんとした紺の背廣をきてをられた。私はのぼせていたので、その夜のこまかいことをおぼえてゐないが、席上、國文學上のこと、藤澤桓夫氏の意見に對し、伊東氏がいやそうじやありません、ちがひます、と

いつて一寸した論争をされた記憶がのこつてゐる。それは別に鼻白むものではなかつたが、どちらも仲々折れないで、いゝ加減なところで同調されさうでなかつた。織田作之助君がうれしさうな顔をしてゐた。

これが、あくまで自分を持してごまかさないう伊東氏の清爽を知つた最初の印象である。それから、詩人會や何かでときどきお會ひすることがあつたが、いつもドキツとするやうな、いやなことをいはれた。

私が地方の雑誌にかいたやさしい詩を一寸ほめてをいて「あなたのかしこぶつた詩よりいゝよ」というやうなことをいはれた。「かしこぶつた詩」といはれて、私は全く本當のことをいはれたという氣がした。

他の詩人の評でも、世評とは甚だちがふ獨特の批評をされた。そしていつも成程と思つた。

安西冬衛氏の「韃靼海峡と蝶」の記念會のとき、安西さんに向つて、「私はあなたの詩はきらいです」といはれたのには、びつくりした。それは、いやがらせでもひねくれでもない、詩人の光榮に値する伊東靜雄でなければできないいまの世に得難い美しい姿勢であつた。誰も、不快な印象はうけなかつた。

それだけに伊東氏の評價によつて私は色々教へられた。滅多に書かれなかつた感想文を私は貴重にした。伊東氏が中原中也の「寒い夜の自畫像」の「一本の手綱はなさず、

この陰暗の地域をすぎる」を引用されたりしたのはうれしかつた。私の愛誦詩だつたからである。また「臨終」を引用された文章によつて、「窓ぎわに髪を洗へば、その腕のやさしくありぬ、朝の日はこぼれてありぬ、水の音したたりてぬぬ」のアパートに住む孤獨な女の死をうたつた作品への愛着を深めたりした。

中原中也の、異様に頭にこびりついてしまふ言葉といふものゝ不思議な魅力は、そのまゝ伊東靜雄の詩に通ずるものである。「詩作の後」に見られるやうに、詩をつくつたあとの坂を下つたやうな動悸の陶酔は、その言葉が全身をふりしほつたものであることを物語つてゐる。「私が愛し、そのため私につらいひとに」といつた言葉や「歴然と見わくる目の發明の、何にならう、如かない、人氣ない山に上り」とか「かの山上に葡萄を食しつゝのたまひしか」とか、非常にわかりにくい言葉と表現が妙に頭にこびりついて、長い間のうちに、心の中にとけ入つてくるのだつた。山雅房の「現代詩集」には「讀者がこれらの詩を性急に讀まねばいゝが」と書かれてゐる。本物の藝術のもつ、あのわかりにくさ、沈痛、渾沌がひそめられてゐる。伊東氏がさぐりつかみ出す自然は、あの本當のことしかいへない日常に象徴されるやうに、一般に見え難い程の内なる自然であつた。その言葉が、讀むものゝ心にふれると、もう流れ消えることのないほどたしかなものであつた。「自然にて、左様、

充分自然に！」といふ詩の小鳥の必死の最後を見つめた言葉の痛切は、伊東氏の詩の在り方を傳へて、激しい。

三好達治氏が一度「伊東君のは、思考がそのまゝ抒情になつてゐるんだから」とその得難い詩境を私に話されたことがあつた。抒情と思考が別になる一般の境地とは隔絶してゐた。その思索の深さの故に、抒情になるといふ不思議な魅力である。三好氏が指摘されるやうに、最も思索に充ちた詩人であつたらう。「問ひはそのまゝ答へであり」とか、「自問に自答して」とかの作品があるやうに、詩作は、つねにはげしい問ひに充ちてゐた。はげしい問ひの故に論理や哲學の達し得ない内奥を交響させてをられた。眞の意味の抒情であつたらう。萩原朔太郎は、早くもそれを見わけられたのだらう。

朝日、毎日兩新聞の三好桑原氏の追悼文は、共に「わが死せむ美しき日のために、連嶺の夢想よ！汝が白雪を消さずあれ」を引用してをられたが、再起できなくとも、生きてだけはゐて頂きたがつた。詩の専門雑誌「詩學」が死を報じて伊藤と誤植してゐたが、詩の墮落を象徴してゐるやうでやり切れなかつた。

伊東氏にとつて「現在」は問題でなく、これからも尙絶えないであらう長い年月の縦の讀者が相手であつたにして

墓 邊 に

——伊東さんのこと——

飛 鳥 敬

首にはタオルをマフラ代りにし、頭には古く餘り綺麗でもない登山帽、背も餘りに大きくはないが肩巾は割合ガツシリした人が白ズツクで少し急ぎ足で私の前を通り過ぎる、「伊東さん」と呼んだ。所は大劇前を南へ半町ばかりの所、これが三回目伊東さんに逢つた時の今も眼に残る印象だ。彼はヒイキにしてゐるオリオン座へ行く途中だつた。私達は波屋（辻馬車に係りのある本屋）の前のホノルルという喫茶店で休んだ。その時の話の内容はもう忘れてしまつた。但しその時 私にフロマンタンのドミニツクを大へんすゝめて呉れた。都會の何處で休らへる？とこの詩にもあるが、私達は ほんのひととき 都會の盛り場で 詩や文學についてさゝやいた。

それより前、小野さんの「大海邊」の祝賀會が道頓堀の石

堂で催された時「小野君の詩に轉廻點がない」と短く批評された時に知つたのが初めてだつた。今はなくなつた創元喫茶で午すぎひつそり休んでいた時 伊東さんが來られたので 今の北極星の西隣りの喫茶店で大分、熱を吹いたのが二回目だつた。昭和十五年 河出書房の現代詩集三巻が出た時 私ははじめて、「反響」を知つた。わがひとに與ふる哀歌 というロマンチックな詩の題に心をとめたが、その時は私は若く「秋鷄」のような名作は餘り心にとまらなかつたが、後

反落葉にたまつた美しい露を
秋鷄は寢酒にして呑んでしまふ

波のとほい白つぽい湖邊で

そこがいかにもアツト ホームな雁と

道づれになるのを秋鷄は好かない

強ひるやうに哀れげな昔語りは

ちぐほぐな合槌できくのは骨折れるので、

（傍點飛鳥）

又、「寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ」

「靜かなグセニエ」

等で私がうけたものは 詩に於ける青春というものよりも「詩の大人」というものだつた。「小さな手帖から」(昭和廿一年廿二年)の中の「訪問者」なる作にも、私は 深

く この「大人」を感じる。この「小さな手帖から」が昭和廿一年廿二年 の作であること、物情騒然だつた終戦後の世の中を思ひ伴せてみる時 徐かた確實な御の世界の響きが 不思議に一個のみづみづしい果實のように私には思へる。野の夜 夕映 雲雀 訪問者 歸路 自然に充分自然に 等、凝視しつゞけた彼の陶醉に近い世界は決して俗に云う 青春性などではなく、芯のとほつた勁さがある。

生涯を詩に捧げたいと

少女は言つたつて

この世での仕事の意味もまだ知らずに

私は伊東さんをいつもこの三行でうけとめてゐる。詩とこの世での仕事の意味とと係り合は 一體どうなのだろうかと。

この二月に池田君が死に、その後、私は伊東さんの死を知つた。京都へ小野さんと「詩と眞實」編輯部揃つて深瀬基寛氏との對談會に向う日大阪驛で、知らされた。池田君のお葬式は鎌倉で久米正雄氏以來の盛儀だつたこと、大阪の南河内の「わが家はいよいよ小さし」とある伊東さんの 人氣ない淋しい詩人の最期と、その二つながら私を悲しませる。めつたに、悲しいなんぞといはぬ小野さんが、訪ふ人少ない伊東さんの家をたづねて「悲しくなつた」と珍らしく云はれたことも 私にはジンと來た。天王山あ

たりの 籤ばかり多い窓外に、私は、この今は亡い二人の詩人とのことを深く思い浮べていた。池田の構想と伊東さんの緻密さと。結局、訪う人のありなし多寡に關りなくその仕事の上に、いつまでも訪う人が多ければいいわけだと思ひなおした。詩人の死にも日をおいてみなければ、ジャーナリスチックに冒瀆することになるのでないかと思う。それは何よりも恥を知る良心を守る人としての詩人の有羞に應へる儀禮ではなからうか、その肉親の死の悲しさを人の混雑の中でなく、そつと離れて、籬のあたりで靜かに溜息つく人のように、私の精神もありたい。私は何處かで伊東さんの「自然に 充分自然に」を金子光晴の「泡」と共に 明治以來の優れた傑作と書いたが 私には 伊東さんといへば 自然に 充分自然に がそのまゝ思ひ出される位だ、反俗的に 服裝など餘り省みなかつた伊東さんの心の中、綺羅は常凡の及ぶべくもないものだつた。詩にかけ勇氣、期待もなく 沈滞しそうな日には、私はきまつて「大人」のそれを考へて尚 心重くなる。いつ、わが魂はそこまで生長するか。變に汚ない背のびばかりの詩の世界の中で ちぐほぐな合槌をうつよりは もう一度雲雀でも讀みかえして見よう。

伊東靜雄を哭す

織田 喜久子

もと兵舎だつたという、野なかの
咳のからむ病棟で
四年間、あなたは暗い時間に耐え
死とたゞかい續けた
もう一度生きて、そこから出ていくために

息をひきとる三十分前
あなたはとう／＼諦めて
胸に手を組んだという
骨はそれから歸つていつた
生まれた町へ
いつも愛し、病んでから一そう愛した
とおいふるさと、長崎へ

それは奇蹟的な小康が訪れた一昨年六月
まる二年ぶりに立つた窓の外に
みどり濃い野面は
追憶のすべての風景から無限の未來に連らなり
あなたを茫然と涙ぐませたが
比になく美しいあなたの讃歌も
思えば秋に消えゆく野の歌に過ぎなかつた
絶えず死の幻覺と痛苦のなかで
しかし、あなたのつよい目は
いつも澄んであたゝかく
鬚の伸びた肉體は
キリストにそっくりだつた

最後の冬
殘照のようなひと時の和ぎらに
洗われたこの泉から
詩は光りあふれようとしたが
肺はすでに殆ど呼吸をとめていた
あなたは急いだ
連嶺に殘雪の消えぬ間を
あゝ、あなたの／＼痛きゆめ／＼は

ついに休らいを得た
きびしい詩人の生涯が生んだ
珠玉の作品をかたみに
その中にあなたが永く生き
わたしたちのゆめを痛ましめる――

註 わが死せむ美しき日のために

連嶺の夢想よ／ 汝が白雲を
消さずあれ
(略)
わが痛き夢よこの時ぞ遂に
休らはむもの／

伊東靜雅「曠野の歌」より

一本の雑草

――伊東靜雄の靈に――

この一本の雑草は
全靈をかけて
大地に深く根をおろしていたのである
枯れたのではない
いつかは甦えり甦える
その日の生命を根に抱いて
あらゆる假定を拒否した
素朴な情熱は
地底に深く喰いつたのだ
この一本の雑草は枯れたのではない

藤村 雅 光

最後の一言

田中克己

つてからも何日かになる。死ぬときまつてゐる病人を見舞ふのには勇氣があるのである。その上、病氣で神経がますます／＼するどくなつてゐる人間に、こちらの表情を見られるのが一番つらい。僕は林檎の入つた籠をぶら下げながら、思案にくれて病院へゆく坂を登つて行つた。しかし面會の結果は來てよかつたと思つた。病人は聲もかすれ瘦せてはゐたが、笑ひかけていろ／＼と話す。最後に「あまり腹を立てなさんな」といつて笑つた。昔ながらの腹立て蟲が四十を過ぎて相變らず腹のすはらないのを隣れんでくれてゐるのである。僕はありがたいといふ目で、笑つて答へて病室を出た。外は三月の末には珍しい吹雪である、雪の小止みになるのを待つて、食堂でうどんをすうりながら、伊東はもう腹を立てないんだと考へてゐた。あのするどい神經の詩人が腹を立てなくなつたのはいつからか。息さへしなくなつてからももう何ヶ月かになる。

重

伊東靜雄にはじめて会つたのは日記帳を見ると、二十年前の昭和八年三月廿八日だつたらしい。比島で戦死した中島榮次郎と天神森の家へゆくとちやうど原野榮二君と話してゐた。この原野君は亡くなつた青木敬麿氏と伊東とともに當時出てゐた「呂」の有力なる同人で「風呂屋雜記」といふのを書いてゐた。初對面に何を話したか。學生だつた僕はもう住吉中學の先生で奥さんを貰つてゐた伊東に、先輩の禮をとつただけでろ／＼話せないで歸つたと思ふ。

それから二十年つきあひをつゞけ、二十七年の三月廿四日、意を決して千代田村の大阪病院長野分院に伊東を見舞ふ。意を決してと書くのには色々わけがある。同じ病氣でゐる保田與四郎から、自分の代りに同病の友を見舞つてくれ。醫師からきけば夏までもつまゐといふ手紙を受取

○

「我が家はいいいよ小さし」

港野喜代子

○裏日本の一寒村に疎開中に私は、伊東さんの、こんな昔の詩をよくなつかしんだ。

——同じ様に永い間、私も呆んやりすわつていた

私は疲れているわけではなかつた

海に向つて　しかし心はそうあるよりほかはなかつた

ただある壯大なものが徐かに傾いてゐるのであつた

そして時々吹きつける砂が脚に痛かつた

(夏の終りの一節)

○大阪へ出て來てからも、私は何度も病氣をしたり、主人の入院さわざなどもあつて、なかなか伊東さんをおたずねすることも、ようしなかつた。が何故かいつも私はこの詩を覚えていた。織田喜久子さんに、或る日の集りで、伊東さんの御報告を伺つてからも、ただ祈るのみであつた。私

が、ようよう機を得て、病床をおたずね出來たときは、本誌三號にも書いたように、すでに死を間近にして、磨ぎすまされ、やつれ果てられた伊東さんなのであつた。それ故に、その日からも、私にとつては伊東さんがどんなにか、すぐれた詩人、潔癖、變屈でさえあつた氣魄の詩人であつたと言ふことよりも、こんな時代に詩を書きつづけ、詩に生きた一人の父性が、様々の勞苦の末四十代の若さで戦死に類した死に方を、されようとしていると言ふこと。脚に吹きつける荒海の砂をじつと堪えている姿正についてのみであつた。いたましく、うらめしくさえあつた。

○二月には、日本未來派の池田克己さんが闘いつきて亡くなられ、つづいて三月伊東さんが亡くなられた。その他にも私の周邊だけでも、この三、四年の間に四十代の妻や夫が、どんなにかたくさん、ばた／＼倒れて逝つてしまつた事など皆、一つの線に連らねて私はつぶやかずにはいられない「みんな一様に戦争死だ」と。

○伊東さんが「ぼく、いいいよ入院だと決つたとき、ああ、これで寝られる。やつと休息が出来る、やれやれと思つた程、ぼくは身も心も疲れ切つていました」と言われたときその氣持や状態が、余りに解りすぎる程疲れ切つてゐる私でありながら、全責任を負つて闘つていられる花子夫人の大變さを同時に同分量で思い當らずにはいられなかつた。だから、なおのこと、私は伊東さんの若いからのほげしい

氣性や、きびしい持論について改めて人々から傳えきいて、感じる事よりは、あの死の直前に、はじめて会つた私へ吐息のように、又きらめきのようにも語られた事は、それは夫人について、お子様について、風が吹いたら心配でならない住家のことについて、そして、あと、わづかに詩についてあの一言、

——港野さんも、もつと慾を捨てて書きなさい

——僕も、さつぱりした詩を書きたい——

と言われた、あの伊東さんの眼光印象だけで十分だと思ふ。

○遺骨が故里の長崎へ旅立たれる前に、織田さんと二人でお伺いした伊東さんのお家は麥畑とバス道の一隅に、全く感傷ではなく、小さな野の花の座のように在つて。

——わが家はいよいよ小さし——という伊東さんの昔の詩を思い生かしていた。私は私なりの手向けを小さく口ずさんでいるだけである。

花に憤つた人の今は花へのひたむきな氣嫌
安らかに 安らかに天の花をむしりつづけて下さる
戦斗機共がむせて、戸迷いましよう

○

煙突について

玉置昌一

日本列島は 曾ては亞細亞大陸の一部であり
日本海は亞細亞の一小湖であつた。南方漂流
族がこの地に漂着した時 既に地球の變動は
これを母體より切離していたと云う。
考えてみるに 我々の不幸はこの時より始つ
ていたのではあるまいか——。

移動する不毛の地 日本列島に 今日又冷
涼の雨が降り 人々は工場の門を潜る。轟音
と共に回轉する推進器。スクリュウは徐々に
進行する反革命の噴煙を撒散らし 我々の頭
上に雨季を招來する。原マレイ モン・クメ
ル ビルマ海人族の願望は この時我々の體
内を去り 家船集團の流れと共に果して何處
に向おうとするのであるか。

日本海流は 今も我々の岸邊を洗い オラン
・ラットの郷愁を浮べて過ぎる。しかし彼ら
の糧も パンダヌスの帆の影もそこにはない。
再び行われる陸橋の陥没は この孤獨なる列

伊東静雄略年譜

明治三十九年（一九〇六年）二月一日 長崎縣
北高來郡諫早町（現在、諫早市）船越名四二七
番地に生まる。父は惣吉、母はハツ。四男だが、
兄がすべて早死したため、昭和七年三月家督相
續。姉江川ミキ、弟井上壽恵男あり。
大正八年四月 長崎縣立大村中學校入學
同一年三月 同校第四學年修了
同一年四月 佐賀高等學校（文科乙類）入學
同一年五月 京都帝國大學文學部國文學
昭和四年三月 同校卒業
同一年三月一日 大阪府立住吉中學校に就職
同一年四月三日 山本花子と結婚
同一年一月五日 詩集『わがひとに與ふる哀
歌』を、コギト發行所より出版。A5判七二頁
同一年一月二日 長女まき出生
同一年六月 詩集『夏花』を子文書房より出版。
B6判六七頁（透谷賞を受く）
同一年八月二日 長男夏樹出生
同一年九月一日 詩集『春のいそぎ』を、弘文堂
書房より出版。A5判九〇頁
同一年七月九日 空襲によつて、昭和一年か
ら居住の堺市北三國ヶ丘町一丁目四〇番地の住
宅焼失。以後、大阪府南河内郡黒山村北餘部四
〇七番地に住む。
同二年一月三日 詩集『反響』を創元社より
出版。B6判一三五頁
同二年四月 學制改革のため阿倍野高等學校に
轉入
同二年四月一日 國立大阪病院長野分院に
入院
同二年三月一二日午後七時四二分 同病院にて
死亡。郷里運營寺に葬る。文林院靜光詩仙居士
（創元社版伊東靜雄詩集より）

島に 林立する煙突をコンクリイトし 刻々
と築かれてゆく無形の城壁。祖先幾代かの血
液は壓しやられ その向う 日本海の水深は
あまりに大であつた——。

馬

蹄鐵が鋪道に鳴る、

蹄のない我らの足に、蹄鐵が打たれ、我らは
そのために列をつくる。に風は奇妙な音を
立てて、鐵槌は狭い部屋の中で鑄型を生む。
今この國に充滿する不協和音。鋪道に蹄鐵が
ふれ、アスファルトは醜く歪み、我らをして
ひとつの行進へと驅立てる。そこに音楽はな
い。
方向が我らの内から遠く夢を放逐し、限られ
た視野の内部で我らは重く。轍は既に行進を
起している。
その時——

馬は、暗い納屋の片隅で、バスをはずされて
晝寝をしている。

鐵骨中央卸賣市場

乾 武 俊

何時の間にこんなでつかい奴が出来たんだ。
濃緑色のペンキで塗りたくつた
中央卸賣市場の壮大なドームだ。
中に入つて仰ぐと、

無限に分割され均衝する鐵骨の力學だ。

あの朝

ヤニ色の脂吹き出た黒焦げ屍體が

トラックに満載され

運び去られたが

ある夜

そいつ等が起ち上り

銀色鐵骨の上によじ登つて

僕等が眠つてゐる間、

がんがながんが
このドームを構築したのだ。
彼等の腫になお空を焼く火焰が見えたか。
僕等の耳にその時も深夜の鐵槌音が聞えたか。
そう思うところろがしんとする。
春陽うらゝかに
いちめんの菜種畑がひろがり
その上のひばりのビイチクビイチクや
そんな風景をヘイゲイして
鐵骨中央卸賣市場は建つ。
やがて生残つた者の食糧は
すべて此處に集積され消費されるだろう。
今はまだ構築されたばかりの壮大なドーム
がらんとして原っぱのまん中に建つてゐる。

泥土の墓

石橋孫一郎

雨に狂つた洪水が
たちまち
地形のフィルムを歪めてしまつた。

山脈は崩れた。
樹木は倒れた。
村落は失せた。
町は浸された。

人々、家畜は
天を睨んで
濁水とともに死んでいつた。

山頂から河口まで
碑のない泥の墳墓がつづいた。
美しい緑の國は
ケロイドの醜惡な貌に一變した。
生残つた人達は
茫然とその一劃に佇んだ。
墓場のさきに
灰色の海が見えた。
沖はるか
生々しい赤肌をむきだして
丸太が何本を漂流してゐた。

(一九五二・六・二五)

ひびき

越智一美

全身で受けきれない
あとから あとから
かぶさつてくるひびきに
すくんでしまう。

空家

暑さに押され外へ出た。
まつ黒な空に夜は起きている
風がかすかにふいてきた
樹がゆれる
とおい道をふいてきて
やつとたどりついた
樹にもつれて風はとまつた
雲が動く
どこへいくのか
むつつりと黙っている
空一面
ため息にふくれあがつている
空気がにごる
あぶあぶしながら上へ逃げていく
地をはつて近づいてくる
雲を横ぎつてくる
空気に逆らつて押してくる
強いひびき

あなたがいなくなつてしまうと
私の胸は空家になつてしまった。
風のつよい日
窓をあけはなし
家具を片づけ
柱にのこつたしみをふきとり
のこり香を全部おいだした。
髪をなびかせながら釘をうつ
窓へ扉へ板をはりつける。
骨にもたれて家をながめると
青い瓦は風の中でひかつていた
誰もいない家を後に
ぶらりぶらり両手をふりながら
私もひとり旅にでる。

海

石濱浩三

PYRAMID

不相應なハイヒールの上に乘つてゐるのは
女では無いのです
あれは虚榮

壇上で囁鳴つてゐる奴は
権力です

何時の日にも
封建の城は崩れず
浮游生物の集團のやうに
潮流に身を任せて
蜷縮と生きてゐるのは
古い人間の心です。

エジプト人は
夢を 一つ一つ丹念に
石に積み上げた
砂漠の真中に

今
我々は何も持たぬ
呪ひの言葉の外は
人殺しの手中のアトムの兇器の前に
身動きも出来ず

だが フアラオのミイラ達は
一五〇米の石の下では
ケロイド症に冒される懸念の無い事を
五〇〇〇年前から知つてゐた。

無賃乗車

鵜崎 博

アスファルトの坂道を

二人の男がまりのようにはしり
おりてくる。

若いぼろぼろの服をきた男は
やつと驛員のついせきをまぬがれ
さつとうのなかにきえた。
みんなにみつめられた驛員は
汗をかいて、帽子をぬぐつた。

日雇人夫

土木工事のあるまがり角を
おおぜいの人夫たちが
ひとりの男をおぶつて走つてきた。

自轉車

竹内 薫 也

敗戦の直後、廢虚のがらくたの中で夥しき
殘骸を見た。

車體のパイプが軋て接がれ 塗装され
ハンドルが リムで鍍金され
組立てられ 製造られ 市場に出た 造作
もなく。

一五〇CCの輕オートバイ、無免許のバイ
クの群れが、今や登場し、いともすまじや
かに追越す。

磨り切れたチエン、ベルの哀音、
せわしなく、疲れた足がベダルを踏んでいる。

二十六吋車の姿を見ると
俺は哀れな人々を思わずにいられないのだ。
酷烈な旗の様な感情湧きのぼり

人夫たちはわたしの前を
右へまがり

栗の花のさいている醫院のなかへ
はいつていつた。

雨のなかをしばらくゆくと
だれのオカミさんか分る
ひとりの女がよくれた前掛をおさえて
はしつてきた。

櫻 草

わたしの机のうえにおかれた櫻草は
ぞえぞえのびてきました。

はじめ自轉車でかいにいつたとき、
まだ芽ばえで、

花屋のウインドウのなかで、かじか
んだこぶしをもつていましたのに、

雪だけの季節もすぎ

けうまたぞえぞえと

ガラス戸ごしの日光と 水をすつて
のびました。

うす紫がもう空氣のなかにとける。

ネクタイの山

梅雨の霽れ上つた街頭で 安物のネクタイ
を山にし 香具師の溜聲が風に抗つている。
通行人が立寄り手に抱り裏返したりしてい
る。

ネクタイは次々買われるだらう。

彼等は若人や安サリマンの胸に派手に鬚
るだらう。

彼等は夕暮れ、汗だくになつた猪首から解
かれ ホツと安堵の息を吐いた人に疊の上
に投げ捨てられるだらう。

彼等は揚句の果て色褪せ寝衣の紐となり身
を磨り減らしてしまふだらう。

安物ネクタイと言う奴は、俺に娼婦の姿を
思い出させてたまらないのだ。

ベル街の一角のカメラ屋の前で、ネクタイ
の山が人々にいらわれ、なぶられているが、
暗雲が彼方の空に圖體を現わし、香具師は
忽ち店を疊んでしまつた。

大衆について

坂本 賢三

先だつて朝日新聞にブリストリー氏の「大衆」ということばについて「論説が載つていたが、大衆という語感もさることながら、一體我々大衆は大衆なる言葉をどのように使っているのだろうか。」

大衆とは社會集團の或る特定の一群を表象する用語ではない。ましてや或る階級を暗示するような意味はさら／＼ない。政治家が使えば直接政治に参劃しない一般民衆を指すであらうし、自ら藝術家と名乗る人達にとつては藝術を理解しない衆生を意味するであらう。どちらにしても大衆なる言葉が餘り香ばしからざるニュアンスをもつて用いられていることはブリストリー氏の指摘する通りであるかも知れない。

下に潜在することは十分忖度し得ることである。大衆とは個性の喪失された複數個體の總稱である。大衆にも多くの義があつて、當然のこと乍ら、各場合に異つた意味を持つが大體に於て masses としてよりは vulgar の意に用

いられる傾向が強い。大衆はそれ特有の屬性を持つ。それは多く附和雷同的であり情性的であり、慣習のとりこであるが一言にして言ふならば、個性と論理性を欠いたものとして特性づけられる。政治的には權力に隨行するものであり、輿論的にはジャーナリズムに乗せられるものである。これが vulgar の方より重みをかけられる所以である、この大衆の持つ特性はオドレエルの如く、小野十三郎の如く容赦すべからざるものではあるが、そ

れは大衆にそのまゝ向けらるべきものではない。大衆に背を向けることが俗流大衆性に対する一つの意志表示ではあつてもそれは孤立したプチブル性をより尖鋭化するに過ぎない。井戸水を汲み上げるためには繩を水中に投じなければならぬように、詩が大衆に背を向けてゐる間は大衆との乖離を益々きわだたせるに終ざるを得ないのであらう。俗惡な歌謡曲の流行を嘆く前に詩人はこの事をもう一度ふり返つて見る必要がありはしないだらうか。

ている。

この事情は日本に於ても變りはない。現在最も必要である文學の上での國民統一戰線が大衆に背を向ける側から、手を引つこめられるのである。詩が大衆に歌われるようになるためには、日本の詩はもと／＼變らねばならないだらう。大衆という井戸水の中に下りて行くことは、水の中に沈んでしまうことではない。俗流大衆に追隨することではない。水を汲み上げる爲である。

ここで問題になつてゐたのは、作家は人の尊敬を失つてはならないし、その作品は「高級文學」でなければならぬというものであつた。彼は「カマレの娘達」は歌謡曲であるといふ、私はそれを辯護したのだが結局理屈のない喧嘩を吹きかけられたのであつた。その日以来、私はカミュに再び相見える機會はなく、解放が近づくと、すぐさま彼が何故國民作家委員會と訣別の口實を探すのか知ろうとしなかつた。彼は惜しみの深淵を垣間見ること足り、私は私で迷ひを持たないよう頭を廻らしたのであつた。彼には文學作品に於ける通俗性が相當問題であり、彼女はそういう作品に對して太つ腹であつた。否、カミュとの行き違ひの實情はすべてを話し合つたのではない、差し出した私の手に彼が石を握らせ

たのであつた。

「愛情に於ける空白は火に於ける風の如きものだ、といわれる。即ち、風は大きな火を煽り小さな火を吹き消してしまふ。しかし、友情の中に共に相居る事は相互の理解に於て、火に於ける風の如きものであるか」というこの論文の書き出しが「風は小さな火を吹き消してしまつた」といふ結果になつてしまつ

紡績女工の詩集

機械のなかの青春

吳羽紡績勞組文教部編
野間宏・小野十三郎
これは、紡績工場にはたらき二十歳前後の女工さんたち二百餘名の生活の詩だ!! 職場の現實、機械への愛情、平和への意欲、故郷への想ひ、それらをせいいつばいにうたいあげ同じにはたらき手である私たちに切實にうつたえかけてくる!!
B6判二〇〇頁 辛二〇〇
京都市左京區北の川西平井町二四

三 一 書房
振替 京都 太四〇三

列島

第五號
辛四〇 一九五二年八月
一〇

海外詩論特集

いかに詩を作るか……マヤコフイキ
状況の詩……エリユアール
詩を街頭へ……芝
詩の記録性について……大江 満
詩劇についての感想……木 下 順二
詩三吉のこと……壺 井 繁治
暴力的な死……福 田 律郎

詩三四編

書評・その他
東京部千代田區神田保町一―三

知 加 書 房

★關西在住の方は下記へ連絡乞う大阪府
守口市祝町六一三濱知章方
「列島」關西センター

コルボウ

京都市上京区

平野宮本町二三

コルボウ詩話会

二つのアンソロジーと
四つの詩集をめぐって

現代詩の成長を人々は色々の角度から様々の焦點に向けて語っている。コルボウ詩話会とは、日本の現代詩人の成長の姿を見ると、市のある特異な例のグループとして見落すことの出来ない存在だと思ふ。コルボウの仕事は一九四九年五月一日の第一回の例会から始められ、現在迄に四十三回のテキストと（四十三號より詩誌として出版）五〇回を超え、例会を持ち、シリーズとして詩集など十一冊を刊行している。これらのことはやはり貴重で、コルボウ詩話会の仕事の一つだと思ふ。私はコルボウ詩話会の例会も知らないし、同人諸氏との面識もほとんどない。その方が私には氣楽だ。なぜならコルボウの詩人達は年令的には私の叔父にあたり父親に位する。この

が、鬚髮白きを加える詩人と禿頭更に輝きを増す詩人の一群が前記の仕事を行行し、更に詩誌としてその活動の繼承するに至るのを見るとき、具體的に現代詩人の年令が成長して来た例證となるであらうと思ふ。

このグループの詩人は實に古くから詩作を續けている人々によつて固められている。青樹の天野隆一、荒木二三、（椎の木）の安藤眞澄、依田義賢、（リアル）の山前實治、天野忠、（四季）の田中克己、（旗魚）の山村順、等々。その他の詩人達もいづれも戦前諸々の詩誌に立籠つて活躍した人々で、三〇年間も詩作を續けている。それらの人達が、「戦争中四散してしまつて、その生命の存否さえも不明だつた詩人達が、まるで自分の體温を探りあてたように、戦後の無残な闇黒の中でやつとお互いを見出しあつて、結びついた」だけに「詩と生活」を追求する態度が、

ことは、とりもなほさず、日本の現代詩人が年令的に成長して来たことを端的に示す。しばしば傳統的立場に立つ短歌や、俳句の陣營から現代詩の幼い年令についての意見を聞く

「團體としての統一された主義主張をわめかなく」でも、その存在の意義を喪うものでないといふことを深く信じ、このような性格をもつた結びづきの基盤の上に、固く維持され培かれて行くであろう事も忝知しているわけだ。

一九五一年版・コルボウ詩集

テキスト（自一集至二四集）

一九五二年版・コルボウ詩集

テキスト（自三〇集至元集）

この二冊のアンソロジーに見られる特徴はいづれの詩人も徹底的な精神の風土に於ての詩人の態度である。それ故に、新しい思考と造型の中に現代的主題をあくまで追究しようとする意欲を見ることがむづかしいが、このグループの詩人にはあまりその様な積極的な意圖は必要としない様に思ふ。こゝでは各々の詩人の共通は「詩と生活」の問題であり、その意味に於て、それらの詩は生活と密着している。然しその日常的な生活の基盤にさへえられたこれらの作品は多くはあまりにも身邊的な人生派的な甘さに墮してあり、これら古い精神の秩序によりかゝつた詩作の方法と實踐には、感性の變革を期待せずにはおら

れない。かかる希望的な立場に立つて考察するとき、消極的ではあるが、現實的な手法のもとに、レアリテの再現と傳達をめざす荒木利夫氏の諸作品「峠の冬」の久滋徹氏「兎器は作られる」の依田義賢氏「黄色い顔」の城小確氏「雪」の依田義賢氏などの作品に注目させられた。特に荒木利夫氏の「千の眼のため」窓をたいて、乳房、つゆがやつてくる黒い唾」に見られる現實觀察の鋭さと主題の展開はその志向する詩のレアリテの飛躍を物語るものだと思つた。

二つのアンソロジーを通して讀者に受け取られるコルボウの詩精神の風土は以上述べた様なところに一般的な結論として歸結していく様だ。然し、これらのことを二十代、三十代の若い詩人達からいくら繰り返し述べられたところで、コルボウの詩人達にはあまり痛痒を感じないことと思ふ。何故なら、かかる詩精神風土と密着している「生活」があるからである。

然し、この二冊のアンソロジーを再讀するとき、四十三號のテキストと五〇回を超える例会を持つコルボウの遺産に新たなメスを入れて見たくなる。五〇回にもわたつて續けられていた例会で何に問題になつていたか全然知らないが、一篇々々の作品を讀むと

き、コルボウの多くの詩人は詩を音楽の状態として、捕捉しているといふことである。それは「ラジオ放送に依る自作詩の朗讀」ではなからうか。山前實治氏の作品などすべて朗讀のために書かれた詩と言つても過言ではあるまいと思ふ。そして、これらの苦心のあとが天野忠、安藤眞澄、兒玉實用、井上多喜三郎、天野隆一、山前實治、依田義賢の諸氏らの作品には充分にうかがえる。特に依田義賢氏の「十國峠にて、彈、檻の中で」は詩のもつ映像を朗讀によつて視覚的な面白味に迄高めようとする努力は充分理解出来ると思ふし、シナリオ作家として著名な氏の仕事の一斑として今後に期待するものは大きい。いづれにしても、この自作の朗讀詩に關するコルボウとしての體系的な仕事は完成されていらないが、山前實治氏の「詩の朗讀基本メモ」という未のエッセイが詩誌「日本詩壇」一三六號に發表されているので、要點を紹介しておこう。このことはこのグループを理解する一助となると思ふ。一、標準語を正確明瞭に發音すること。二、自然に發する聲で決して聲を誇張しない。三、詩は朗讀に適するものと適しないものとがある。四、先づ詩作者の意圖を充分のみこむこと。五、自然に抑揚づけられる

のは差支えない。という様なことが書かれてある。少くともこれらのことは實際の體驗の中から理論づけられたものだと思ふ。

コルボウの精神的風土について、あまり希望的でない觀測ではあつたが、やはり、コルボウの詩人達が現實的課題との對決にあつて今後如何に変革されて行くであろうかといふことには、興味も持つて行かうといふことには、興味も持つて行かうといふことには、興味が持つて行かうといふことには、完全に發揮しうる機能としてのラジオ、テレビ等の發展と共に朗讀詩が如何に民衆とのつながりに於て傳達の役目を果せるか、フイルターとか、エコーマシンなどの使用により、如何なる効果を出し得るか、これらの種々の問題は單にラジオ・ドラマの演出家、職業的聲優のみの問題としてでなく、詩人自らの問題として考えるとき（輪讀詩、群讀詩、合唱詩など詩の高揚と宣傳について多く問題は残つてゐる）コルボウの詩人達の實驗の成否如何は現代詩の上に大きな遺産を遺すものと思われ。

天野隆「詩集「雲の耳」」覚書

（作品三十五篇）

文庫版のコボルウシリーズNO8として出版された「雲の耳」は天野隆一氏の第四詩集

になるのだろう。氏の従来の作風などに關してはなんの豫備知識もたない。ただ詩誌「日本詩壇」一三六號に「青樹について」の一文で詩と詩論の運動などが、青春の詩作に與えたことなどを回想して「その間私は抒情的な作風から超現實派となり更に主智的なものへ變化し」て行つたと語っている。

この詩集は三章に分けて編集されている。第一は、揚子江下流の情景と都市を表現したものであり、これはかなり成功している。第二章の日本國內の旅行により得た名所古蹟の案内を旅情に、抒情性として結晶させたものであるが、この短歌的抒情には僕等はついて行けない。第三はウイットの効果をねらつた一連の作品だ。この効果の發展が鋭いサタイアとなることに僕は一番期待出来る様に思つた。

佐々木邦彦詩集「ケロイドの頬」覺書

(作品十六篇)

赤松俊子の口繪並裝畫によるこの小詩集はこの詩人の内的論理がぐりぐり出す孤愁な住まいの中から人間性を奏でる絶唱である。ケロイドの頬、風景畫家のかなしみ、雲はながれのまにまに、うしろそしもの歌、ふたたび過去への歩み、などの作品に見られるこの

詩人のユマニテは原爆投下による人類が最初の花の如く化し、石に刻まれた影となつた事實への深い悲しみと憤りに満ちた一つの哀歌として見事に歌ひ上げられている。原爆の被害を人類の最初に蒙つた日本人はすでにいくつもの原爆に關する詩を見せられている。然し廣島や長崎の原子爆弾を通しての平和への呼び聲をいくつ詩人が繰り返しても、それは決して無意味ではなく、水素爆弾さえも問題とされている今日、更に執拗に歌われても然るべきだと思ふ。現代の詩人が詩を批評として感知する能力を持たず、單なる音楽としての状態でだけ抒情の意義を語り、花鳥風月に精神を志向させているその様な作品がいつまでも詩人によつて書れるとするならば「加害者たるものの中核を實感として、描きつくし」てはおらずとも「被害者を刻明に實感として描く」ことはまだまだ必要だと思ふ。いづれにしても、佐々木氏の「墓標の街へひろしま」にて「情應は決して行動への契機として組織されているのでもなく、むしろこの詩人の平和への念願は不安と孤獨におののきながら「光のみちる大きな平和へ限りないあこがれ」によせており、ケロイドの頬につながるものもろの「そうした僕の白い炎のようなかんがえは」あとからあとから湧い

てきて」讀者を暖い人間性の息吹きにふれさせる詩集となつて結晶している。

荒木二三詩集「二つの帆」覺書

(作品二十九篇)

(1) 殺徐調、(2) サタイヤ、(3) メランコリイ、(4) 花と子供、(5) 捨て猫、(6) 雪女とこの詩集のコントラクションは實に巧妙である。この巧妙さそのものが、この詩人を印象づける。それ故「二つの帆」を読むことは讀者には楽しい情感を與える。林語堂の「藝術はクリエーションであると同時にレクリエーションである。しかし自分としては後者の方により多くの重要性を認める」という言葉に感銘するこの詩人の志向も勿論後者にあり、その意味に於て、こゝに收斂されている作品の多くは成巧していると思ふ。因に(2) サタイヤの「臍」はその鋭さを適確に見せている。それと共に注目すべき作品として、(3) 花と子供の一連がある。自作詩の朗読という問題の立場から眺めて、そのリリズムにすぐれたエロキューションを感じた。

相馬 大詩集「影」覺書

(作品三十六篇)

直喻は今日の詩人にとつてあまり魅力では

思 い 出

森 口 武 男

あるかへ、というと
あるとも、という
ほんとかい、という
ほんとですとも、と
裏からおかみさんが出てくる。
そして
ぼくは米を二合かりて
翌々日の配給にすべりこんだ。
そして
ついで
終戦にすべりこんだ。
あのとき、
隣の夫妻が
こつそり米びつの底を
かすつていた音とともに。

ないが不手際なアレゴリーよりも効果的な場合がしばしばある。例えばおびただしい直喻の繰返しで歌われている。ルイ・アラゴンの「詩論」などその好例だろう。それに引き替え、重畳された社會狀態下の中で書れる詩にアレゴリーを驅使する傾向が多く見られて来るのは充分理解出来るとしても、自己過信に落ち入つたアレゴリーは、はなはだ危険なものだと思ふ。詩集「影」は全篇アレゴリーの活用により、成立されているが意圖する對象の把握が充分でなく、客觀性に缺けてゐる爲、多くの作品が一人よがりになつており、然もその習慣の中でこの作品が書れたということは致命傷的だと思ふ。それらのことは一篇々の作品を検討した場合にも言えることだが後記に「影について」という一文がある長いので全文引用は避けるが、「日々吾々の眼前に展開されている世界の現實は吾々人類にとつての大きな實驗である」「日々實驗を重ねている世界の大きな現實を私は影と名附けた」とあるように、かゝる思考の傾斜から發想されるアレゴリーに強靱な批評精神を願求することは困難であるかも知れないが、アレゴリーがダイナミックな行動性を確保するには、まずなによりも、強靱な批評精神に支えられている時だけだということを銘記して欲しいと思ふ。この詩集が、日常生活の中から、抵抗への道を志向しているだけに、より一層僕には無理な注文がしなくなる。

(木場康治)

津 波

港野喜代子

めまいして、炎天の街に沈む

自分が今、どこにいて

人々が どのように迫り

人々が どのように屍目をくれ

人々が どのように刺すとも

じつと うずくまり

亜流ガス吞み分ける しばし

躁音の中に ふしぎな きしみが近づく

黒い火渦

アスファルトの熱氣を踏みつけて

重くはかない忍耐の足どりに

箱車が一つ

女の一生をのせて

私の中を のろのろ とよぎる

巷に孤り浮きつ沈みつの

私の中のただよいは通り過ぎて

今、 ぼのぼのと手を

聲の人々と握り交わし

つれなく黙つた人々の眼や耳や背に

箱車のきしみ こめて 今こそそうたう

私の中の八月六日を

かすかに眼を まばゆい街に見ひらき
少しづつの歩みを

「二十二年度棚上げの米を家庭に……」

「九州の水害地へ救援を……」

「和歌山の水害地へ救援の手を……」

「黙殺されつつある内灘を……」

「全國基地、絶對反對に署名を……」

「RRセンター移轉、擴張反對を……」

こんなにもいつときに メガホンが

八方から ふりかけて来る呼ばわり

私がつぶさになめた災害の数々

私ではとりかえしつかぬ月日

私には はねかえせぬくらし

こんな ところで地を這うて

熱風の中に栗肌立つ寒氣

耐え切れる限度を越えて

炭俵や ぼろくずの中に

口をあいて ぐつたりと眠る赤兒のせて

箱車は私を轢き切り

ギラ／＼の街を どこまでも押し進める

人々は、うるさげに苦笑して

さり氣なく 捨てて行く吐息の一つ一つが

十圓、二十圓、私の中にもしわくたに溜り

十字架の子、御佛の子、ジブシーの子

廢兵の子、基地の子泥血の子等のせて

私の箱車は火花のヘリコプターになる

めまいなど、醒めきつて炎天の街に沈む

旗はうなだれて

二 慎 井 村

どの山にも

どの峯にも

遠い異境の土に倒れて

故郷の母に血返吐で叫んだ

「おかあさん」の聲が木霊する。

どの河でも

どの酒でも

穴の開いた甲板で

踊る水兵服の髑骸が

搔きたてる波が逆立つ。

空を翔ぶ小鳥でさえ

茸雲の閃光の

ヒロシマの空を避けて飛ぶのに

此の細長い列島の上の小旗は

どれも此れもうちひしがれたまゝ

重い泥靴をさゝえて

ひるがえろうとはしない。

澱粉工場の突風

足立巻一

盆地はいちめんの青田であぶら照り

動くものはなにもなかった。だのに

青田のまんなかの澱粉工場にそんなとつぜん來た。

突風は

天空の一點から垂直に

うなりを發し

きりもみ狀にちいさな工場だけを襲つた。

その証據に

依然として青田はそよぎもしない。

たちどころ

澱粉が砲煙のように噴き上り

くすれ

うすを卷いて流動する。

しかし

それはほんの數秒間にすぎなかつた。

やがて

何事もなかつたように日は照りつづけ

ただ白い微粒子の群だけが

しすかに

うつすらと

イネの葉つばの上に舞いおりていつただけだ。

無数の目

林影

うす笑う目目目無數の目。まばたきもせず降りそぐ痛い視線。僕の蒼い額にくちびるに、すりへつた膝骨に、醜い臍に、黒子の一點一點に。

よろめきながら僕は立ち上がる。身體一ぱいに痛い視線をあびながら。壁を又押して見る。が僕を閉ざしたまゝ依然と開かない。と無數の目が一齋にほゝえみ、どつとあがる哄笑のあらし。

涙もなくうつ伏せたまゝ手がひとりで伸びてまさぐる―何かしやぶりたい―と降りかゝる齒あとのついたメロンの殻々、それからあざ笑う目目目無數の目。

足も頭を投げ出したまゝ、耳鳴りだけが忘れた歌の様になつかしい。満ち足りたげな視線が笑っている。隅で白く風化する親じのどくろと見比べながら。

蝙蝠

蝙蝠

三篇

藤村雅光

蝙蝠が

私の眼からはなれない

眼をつむると

眼のなかにとびこんでくるのである

夜になると

壁にとまつて動かない

私の運命のなかで

この蝙蝠は死なねばならぬ

○

私の部屋から
蝙蝠は出ていかない

蝙蝠のとんでいる

部屋から私は出ていけない

蝙蝠も

私の運命も

壁にぬりこめられて

動けなくなる日がくるであろう

○

灰色の壁に

雑草の莖の青さがにじんでいるのである

私の心の陰影なのだ

蝙蝠が一匹とんでいる

海

坂本賢三

海の中に君の見たものは何か

海の中に君の聞いたものは何か

琥珀の塊が聲の記憶を湛えるとき

眼帯は難破船の映像を印すだろう

懼持つ手に響く音は

透明な暗礁の潮騒よりも高く

帆柱に縛られた肉體と耳殻の結晶は

アフロディットの肌を崇信しようとする

丸窓

ラシブ

船橋

温い光の中に生きる射手は
戦争の終つた日から既に居ない。

彼の見るのは故郷の幻

だが 彼の聞くのは

異國の合唱である

君はもう一度見るだろう

分裂する緑の鳥影を

君はもう一度聞くだろう

陶酔の夢の歌聲を

閃くナイフ

断ち切られた網

君は帆柱を蹴つて身を投げる

だが君がそこに見たのは

黒い巖と流木

暗礁の波動を聞くのは

明日の果を見る機関士と

嵐の始まりを知るマストの水夫である。

獸の手

服部 寛輔

二の腕のふくらみを息づかせながら、手がすべつてきた。

紅くマニキュアした白い指がのびてきた。

柔らかな産毛を分けて手首を巻いている腕輪。

そいつがなまめいて輝き

五本の指がある表情をうかべてしなやかに揺

れたと思つたら

スイと首に巻きついた

とたんに

周囲の景色がつやのある濕めりをもち

七つの分光線がもつれ合つて盛んな眩惑だ。

○ ○

バア「アイゼンハワアー」では

内にこもつた溫氣で窓を曇らせながら

肉色のドレスに軍服がはりついていていた。

オールウェーブのラジオは世界各国語のニユ

ースを叫び

電蓄からは斷續するメロディがとけ出る。

卓の上に乗つた月賦の自動車やコカ・コラ。

變色した教書やデューボン社製のテーブル掛け。

壁に吊るされた歌麿やゴッホにヴァー ジニア

葉の煙。

床という床にはTNT爆藥の炸裂音がこもる。

お籠もりの終つた炸裂音は

時をえらばずドラム百萬個分の合の手を入れ

その度にバアの屋臺骨がギン／＼きしむ。

一きわ華やかな一踊り

サア みなさん

サア!!

○ ○

首に巻きついた手は

しなつた指であごひげを逆になでたり

頸動脈のあたりを探ぐつたり

耳たぶをもてあそんだりした。

くすぐつたいので「オイよせよ」

目をむいてコイツ奴とばかりにうつむくと

白い手はいつのまにか赤黒く毛むくじやらで

あり

金の腕輪はまるで蕃人のそのように不氣味

にまといつていた。

びつくりして聲をあげようとした時

頑丈な腕に力がいいつて喉がしめ上げられ
「話がちがうぞ!!」
などとはとても云えないようになってしまつた。

さかんに俺の名を 呼ぶ氣がする

河北潟を回れば二五・五キロは
あるというが、まだ葦が群生し
ているか、どうか

あらし 吹きたける夜。

石つぶて。

が、火となつてとぶ。

八列島の恥部くだけよと。▽

いかり なりひびき。

こころ狂う 防潮林の。

天にいとむ貌々。

溝口 作太郎

詩人の破片

亜 騎 保

黄昏の低い地面で
人間が笹の葉ツパのごとく
觸れ合う
オトがする

太古のオトという
オトが今に傳わる

村の外れのヒマワリの
カクンと傾くオトがする

風も吹かず
笑いも聞えず
物價も動かない日

點るときだけの
ホヤの温み

このぬくもり
然し
これも去つていくだろう

花がシボンだり
葉ツパが散る
ヒバリがかきわけて飛ぶ思ふ
人生はいそがしい
と、三十七の男が
アゴの髯を刺つていた

彼の上には
榮光もなければ
貯蓄もなく
虹もない

四五枚のお札のため
夜おそくまで、何事か
思いを凝らす

荒地へ出かけたまま歸らない
友の青くそげた頬が
思いだされる
固い男であつた
彼は獵銃を持つていた
觀念の奇妙なたち
脱色したボディ
獵銃の先に土がついていた
のが此頃そらぞらしく思いだされる

彼は歸らない
彼は歩いて歸らない
然し
これも忘れてしまうだろう

なさけというものの
ホソき存在を
サビた輪のごとく感じる

忘れては思いだす習性
ランプのごとき

窓をあけよう
窓をあけよう
それが總てであるごとく

晝のパン
三時の番茶苦き
彼のノドを通過し
彼の腹部にとどまる
もの、急ぐな
彼にとつて難しい消化の働き

運命を見てあげよう
運命を見てあげよう
手をだしたまえ
君の手は
何んという脱脂化

姿勢

權敬澤

朝鮮半島の東海岸から西海岸へ
四メートル巾の有刺鐵線が延々と流れ
北と南の痛い國境線をくぎる。
日本製の鐵條網の中で
うずくまる悲しい姿勢の夥しい映像。

暗夜の朝鮮戦線に明るく一點がある。
それは、非武装地帯
△ブン山▽

地下足袋

知っているか。

大阪驛前、

ここは昔海だつた。

シャベルをつきたて つきたて

十メートルも掘れば

古代の貝殻が、五二年夏の光を浴びる。

現地報告を読みつゝ私は思い出す。
一九四四年夏の悲しい姿勢を
大阪驛で見た朝鮮人徴用工の群れを……。
煤塵を浴びた周衣
鼻さきを膝の間に埋めてうずくまり
沈黙は疲れ切つて青く
崩れた視線。

工事完成。

俺達 土方の仕事は終つた。

ワイヤーが切れ

落下する鐵骨に

頭を碎かれた△よ

さらばだ。

見ている僕は
母國語を話せず、
父祖の地を知らない。

仲間の仕事を求めて、別れて散つた。

天にある雲の形を崩す。

たちまち鐵筋が組まれ
セメントの泥をぶちこみ

高く鐵骨が立つ。

灼熱した火のリベットが

固い小さな鐵の肺となつて

赤錆だらけの工事現場に亂れ飛ぶ。

鐵をうつ音 むしる音 はげしく

ビルディングの尖塔に旗ひるがえり
螢光燈きらめくのはみるみるうちだ。

知っているか。

新築ビルディングの底に

古代の貝殻の中に

僕の黒い地下足袋が埋めてある。

信

雀

南淵

四天王寺のだだつ廣い境内に
枝もない、葉一つない大きな裸木が立
つてゐる
虚空にシュールレアリズムの腕をくね
らせたこの大木は
四天王寺に五重塔や大門があつた頃
緑の葉を繁らせて無數の町雀のねぐら
だつた

それ等が焼かれた時この大木も焼けた
以來一羽の雀もこの裸木にとまらない
彼等はさつさと西の方天王寺公園へ移
つていつた
恐らく、善男善女が
この四天王寺に五重塔や太子殿を再建
したとて
雀はあの裸木に戻らないだろう

遅い朝

ジャック・プレヴェール

開高健譯

亜鉛を張つたカウンタの上で
固煮卵の割られる
静かな物音は
おそろしい
飢えた男の
ころのなかで
ひびくときは
おそろしい
飢えた男の頭も
おそろしい
朝の六時に
きれいな飾り窓を覗いて
埃まみれの頭を眺めるとき

「ボタンの店にお入り」の窓硝子に
映るのは
汚れた頭ではない
頭のことなど
考えも 呪いも しないが
夢想するのは
もう一つの たとえば
酢ソースをたつぷりかけた仔牛の頭とか
何とか 食える
頭のことだ
男は ゆつくり
ゆつくり ゆつくり
顎をうごかし
のしかかる世界に
歯ぎしりする
そして指折り
一、二、三、
一、二、三、これで三日
まるで食つてないんだ
何を言つても
追つつくことじゃない
馬鹿げたことだ
とにかく

三日 三晩

食つてないんだからな
窓のうしろには
脂ぎつた鷺鳥の肝臓パイに
葡萄酒漬けの魚
魚は箱に
箱は窓に
窓は巡査に
巡査は恐怖に
六匹の鰯に
何という護衛の嚴重さだ……
男は決意し カウンタに寄つてゆく
「クリーム入りコーヒに
バター付きトースト」

男は いらだつ
頭のなかに
言葉の暴風
言葉の混乱
鰯 固煮卵
クリーム入りコーヒ
ブラツク・コーヒ ラム酒 食物
クリーム入りコーヒ
クリーム入りコーヒ

コーヒ 犯罪 黒い 血
お偉方が まつ晝間
家の近所で 咽喉を切られなさつた
臆病な犯人が 盗んだのは
たつた十錢玉二つ
つまり
コーヒ一杯と
バター付きトースト二切れに
給仕へのチップ代にきつちり
という次第だ。
亜鉛を張つたカウンタの上で
固煮卵を割られる
静かな物音は
おそろしい
飢えた男の
ころのなかで
ひびくときは
おそろしい

西和中學校の詩文集

砂丘作品集

同人乾武俊氏が指導する和歌山
市西和中華校文藝部の手になつた
詩文集だときいて頁を繰りました
が、流石にありきたりの校友會誌
の域などとはるかに脱して、巻頭
の三年玉川岳雄君の「地面挽歌」
など、強く心をひくものがありま
した。「指導の貧困のみが目立つ
た。」と乾氏はその「まえがき」で
ごく控え目に批評を求めておられ
ますが、なかなかどうして、巻末
の乾先生を圍む生徒たちの座談會
にもある通り、詩を書くよるこび
と苦しみとを互いにわちあひな
がら、もつぱら「子供達の曇りな
い感受性」をひき出すことにつと
められてゐる乾氏の指導理想は、

子供達のためしに見事に結實しているように思われました。

いつたい、テンエイジというのは、人生の青銅時代ともいふべきなのでしょう。戦後いゝんなべき子供達の詩集、文集が出版されて私達の目にもふれることがありました。が、少年少女達のたぐいまれなる清純な眼がとらえた生活の眞實は、例外なく私達の心を強くとらえたようです。近くは無着成恭氏の「山びこ学校」「ぶぶきの中に」さては「緩方風土記」の各篇などがあります。尾崎書房の「全日本児童詩集」大関松三郎君の詩集「山芋」さらには宮本百合子編、女学生の生活記録「私たちも歌える」など、いまだに私の座右を去りません。

「砂丘作品集」の紹介文としてはいささか逸脱の氣味を免れませんけれど、さいきんこれら一連の詩集、文集の流行を、何か「爲にする」所作としてみるむきもあるようで——これは全くのひが目だといわざるをえぬでしょう。とくにこれら少年少女達は、「原爆の

子」たらざるとも例外なく戦争の申し子ともいうべきで、「前の晩空襲があつたり、家の用事を手つたわされて（宿題を）する暇がなかつた時などは、罰として教壇に立たされました」と三年岩井めぐみ君がその小學校時代を回顧して書いているようななじめな状態をやつと耐えぬいて育つたまじしいと肉體が、彼女達なのであります。さいわい戦いやんで子供達は本来の笑顔を回復することは出来たものの、大人たちの不正にささかの疑問を抱けばたちまちに「村八分」になりにかねまじき愚と妥協とが彼女達をとり囲んでいるのであり、私自身、身近かい友の受持つ少女の綴つた作文が、PTAとかの壓力でついに削除されてしまつた文集を見せられたことがありました子供達の眼を恐れるのは、實に「裸の王様」の取巻き連であり、これらの刊行を何か「爲にする」所作であるとみるのは、全く子供達の曇りない眼が、確かな批評性をおびてくることを極度に恐れるものの謂でありましょう。

編集後記

本號をつつしんで伊東靜雄氏の靈前に捧げたる。伊東氏逝去されてから半半歳、心よりその御冥福をお祈りするものである。巻頭の作品抄は、小野十三郎氏をわすらわしたが、伊東氏の全詩業は、創元社版、桑原武夫、富士正晴兩氏共編「伊東靜雄詩集」にくわしいから、なおそれによられた。本號の思あふる選刊を、とくに早くから心あふる追悼原稿をよせて下さつていた諸氏に改めておわび申上る。

本誌創刊の準備會がもたれてよりすでに一年を経て、ここにやつと第八號をおくる。十一月創刊以來月刊を期していたのだが、印刷所の思わぬ故障のため四ヶ月の欠刊をみた。本誌創刊の意圖が顯現せられるには、なお今後にまつべきところが多いので、諸氏いつそらの御協力をおねがいする。

第九號よりは再編成を期している。

〔柏岡〕

療養所のお母ちゃんとかへ行く

夕暮

夕暮には匂いがある
今まで忘れていた匂いがある
急いで歸る學生さんにも
空の馬車馬にも
まだ練習に餘念のない選手にも
夕暮は匂いを惜しみなくただよわ
す

幸い、乾武俊氏は、明るい生徒たちの信頼をえて、その教え子たる青少年友達の直截なる批判眼をますますきびしく、しかし笑顔を忘れることなくひき出してゆこうと思念しておられるようであります。一夜にしてその相貌を一變するといふ砂丘にも、なお葦の穂は天をついて伸びているようで、乾氏を中心とするさらにゆたかな結實を、心より望んでやみません。さいごに、三年玉置比佐子君の詩二つを紹介しておきましょう。

競馬

私の前の人も 前の人も
みんな「春木」「春木」と切符を
買う

競馬へ行くのだ
春木へ行く人は
みんないい洋服を着ていない
顔もいい顔をしていない
切符を買うとあわてて行つてしま
う

私は小さい聲で言つた
「加太」
私は

夕暮には匂いがある
乳色の霧が建物を包んで
三輪車の子供に
夕飯が待つている
夕暮はそれらを
ただ黙つて
少し冷たい手で
こまかい霧を流しながら
見つめている

夕暮は素晴らしい
夕暮の持つ匂いと冷たさは
温かい湯氣の夕飯を思い出させ
みかん色の電燈を思い出させる

タぐれ

もうすぐ夜がやつて來ようとして

そしたらお前は何處へ行くの
その乳色の霧はどうしてしまつて

匂いは明日
また同じ匂いがするの

夕ぐれよ
明日 また同じような

何かを思い出させる匂いとを
持つて來ておくれ
そうしたらわたしは
今日よりもつと何か
素晴らしいものを見つけ出すに違ひ
ないから

「砂丘作品集」

和歌山市西和中學校文藝部編
同校發行・四六變形版八〇頁
作品四四篇・写真二葉・座談
會九頁・一〇〇円

〔柏岡淺治〕

詩と眞實
制規

▽同人加入希望者は原稿・略歴に同人費月額三百圓を添えて編集所に申出ること。

▽購読希望者は誌代一ヶ月分五十八圓又は半年分三百圓（何れも「共」を小爲替で編集所宛送付のこと。

▽原稿締切は毎月末厳守、必ず
二十字詰原稿用紙を用い取捨
御一任のこと。

▽編集發行に關する一切のは左記宛のこと。

詩と眞實編集所

電話天王寺(77)二七〇五

詩と眞實
第八號

昭和二十八年十一月一日 印刷
昭和二十八年十一月五日 發行

編集兼
發行人
山中二
郎

印刷人 鹿野五郎

印刷人
鹿野五郎

大阪市天王寺區上汐町六
大阪市立文化會館內

發行所 關西詩人會

伊東靜雄詩集

創元選書

桑原武夫
富士正晴 共編

伊東靜雄は、昭和において真に本質的な仕事をなした最も純粹な詩人である。その細くするどい痕跡がいかに深く切れこんでいたかは、時がたち、幅ひろく浅い痕跡が磨滅するにつれてはつきりしてくる。日本人が真に詩を愛しつづけるかぎり、百年後、彼の名は一そう光をましているであろう。 (桑原武夫)

『わがひとに興ふる哀歌』より絶筆までの全詩業をおさむ。

B6判 220頁 ㊦ 230

東京都中央区日本橋小冴町二ノ四

創元社

昭和二十八年九月一日
昭和二十八年九月五日

印刷
発行

時と眞實

第八號

(毎月一圓五〇日發行)

定価五十円